胸をしめつけられる漢字

京都大学大学院
人間・環境学研究科 教授
阿辻哲次

春に東北地方を未曾有の大災害が襲った。被害を受けられた方々にはまったく申しあげることばもない。一日も早い復興をお祈り申しあげます、という月並みな言葉しか書けない自分の無力さが、まったく情けない限りである。

被災地のその後の状況を報じるニュースの中に、私には胸をしめつけられる漢字がしばしば登場する。

仙台市の南に位置する名取市の東部で太平洋に面したところに「ゆりあげ」という地域があって、漢字では「閖上」と書く。「閖」は珍しい漢字だが、この漢字が作られたのには、次のようないきさつがある。

平安時代のこと、この海岸に観音像が漂着し、波に「ゆりあげ」られていたのを漁師がみつけ、それ以来この浜を「ゆりあげ浜」とよぶようになった。

この段階では地名を漢字で書くことはなかったが、ずっと時代がさがって、江戸時代の仙台藩主伊達綱村（だてつなむら）が菩提寺を参拝したおり、山門内からはるか遠くの海岸を眺め、「あれはなんというところか」と家来にたずねた。従者が「ゆりあげ浜にございます」と答えたところ、さらに「どのような漢字を書くのか」とのご下問。「漢字はございません」との答えを聞いた藩主は、「この門の内側から水が見えるから、今後は門の中に水を書いて『閖上』とせよ」とおっしゃった、というのである。

まことにお気楽な話である。山上にある寺院の門から海岸が見えるところなどいたるところにあるが、この殿様のデンでいけば、門の内側から遠望できる海岸はすべて「閖」という字で表されることになるはずだ。しかし殿様から漢字を賜った住民にはまことに「ありがたき幸せ」で、「閖」はこうしてこの海岸を意味する地名として使われることとなり、いまでは「JIS漢字」の第二水準に入っているから、パソコンのみならず、携帯電話で簡単に表示できる。

殿様の興趣から作られた漢字が、国家規格にまで取りこまれた事実に興味をもった私は、五年ほど前、この漢字を見るためだけに閖上に出かけた経験がある。

JR名取駅からタクシーに乗った。閖上は魚がおいしいけれど、特に赤貝の産地で、東京の寿司屋で出される上質の赤貝はほとんどここのものだ、という話を聞きながら十五分ほど走ると、そこが閖上漁港だった。静かでひなびた漁村だった。

港近くの寿司屋で特産の赤貝を堪能し、駅に戻る途中に閖上中学校があったので立ち寄ってもらい、「閖」の字が書かれた校門や門札などを写真に撮っていると、運転手さんが不思議そうな顔で、「この漢字そんなに珍しいかねぇ。私ら子供の頃から見慣れているけどね」といった。

駅までの車内でも、最近近くに大型スーパーができたので、たくさんの人がここに来るようになって賑やかだとか、赤貝は通販でも買えますよとか、話好きの運転手さんがいろいろ楽しませてくれた。

その閖上が、壊滅的な打撃を受けたというニュースを見たとき、私は涙が止まらなかった。漁協は膨大なガレキの山と化し、写真を撮らせていただいた閖上中学校も大きな被害を受けつつ、避難所として使われたと聞く。

珍しい漢字にひかれて訪れただけのご縁だが、いいところだった。復興したらこんどこそ、通販で赤貝をたくさん取り寄せるつもりでいる。

書籍紹介

戦後日本漢字史

新潮社　阿辻哲次著

昭和20年、日本にやってきた占領軍は、何千という文字を使いこなさなければならない漢字を「民主主義」の障害と考え、国語のローマ字表記を提案した。その後、漢字の使用を制限した「当用漢字表」、使用の目安へと転換した「常用漢字表」を経て、29年ぶりに刷新される「改定常用漢字表」まで、「書く」文字から「打つ」文字となった変遷を辿る日本語論。

270ページ
ISBN 978-4106036682
定価¥1,200（税別）

当て字・当て読み 漢字表現辞典

三省堂　笹原宏之編

運命（さだめ）・時代（とき）・秋桜（コスモス）・本気（マジ）など、現代社会で流通している「当て字」「当て読み」の表現を多数収録。出典は漫画、歌謡曲の歌詞や広告など、私たちが普段目にするものが多い。身近な漢字表現から、漢字の面白さ、豊かさを改めて知ることができる一冊。

912ページ
ISBN 978-4385137209
定価¥3,500（税別）

※上記の書籍の購入は、お近くの書店もしくはインターネットでおこなってください。